

身近な情報を実践活動に生かす特別活動 —6年「野並っ子チャレンジプロジェクト」の実践を通して—

名古屋市立G小学校

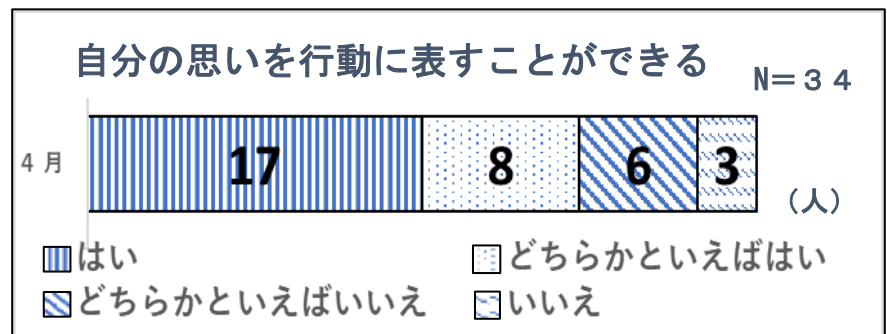
1 研究のねらい

本学級の児童は、向上心があり、気持ちの優しい児童が多い。それは、4月、最高学年となり、学級目標を話し合うときに、「低学年の手本になりたい」「1年生に優しくしたい」といった思いを記述したり、発表したりする姿にもよく表れていた。こうして決まった学級目標は「チャレンジャー」となり、これから小学校生活最後の1年を学校のためのために頑張っていこうと話し合った。

4月、私は、「目標達成に向けて、低学年のみんなに優しく声を掛けたり、接したりしていこう」と声を掛け、児童の様子を見守っていた。しかし、実際に1年生と休み時間に接すると、どうしたらよいのか分からず、自分から声を掛けたり、1年生にあまり優しく接したりすることができなかったと話す児童がほとんどだった。

このような児童の姿は、1年生のために何かしたいという思いはあっても、それを具体的な行動に表せなかったり、自分の考えが正しいと信じて行動できなかったりする様子が表れていると捉えた。

実態調査では、学級の約3割



の児童は、自分の思いや考えを具体的な行動に表すことができず、進んで行動できていないと回答していた。また、約7割の児童は肯定的な回答ではあったものの、実際には1年生との関わりをはじめ、下学年のために積極的に行動できていない姿が見られ気になった。最上級生になって、学校のために自分たちの力を役立てたいという思いをもっている児童は大勢いるが、自分の思いを行動に表すことに消極的な実態を捉えることができた。

このような実態を踏まえて、私は、「よりよい学校づくりのために、進んで取り組むことができる児童」を育てたいと考えた。実践では、児童の思いを可視化、共有することを指導の重点とし、下学年の児童のために活動する「野並っ子チャレンジプロジェクト」を立ち上げて進めていこうと考えた。

2 研究の内容（対象：6年生34人 男子17人 女子17人）

(1) 基本的な考え

進んで取り組むことができるようにするために・・・「思いを可視化したグラフ」

6年生の児童から学校のために自分たちの力を役立てたいという思いを引き出し、具体的なプロジェクト活動につなげていくためには、一人一人が思いや考えを出し合い、学級全体で共有することが大切である。また、本実践では、6年生と1年生が関わる活動となるので、6年生の児童が、自分たちだけではなく、1年生の児童の思いにも目を向けながら活動計画を立てることが重要であると考えた。

そこで、統計的手法を用いて、互いの思いや考えを情報として集め、グラフ等で可視化することで共有を図り、6年生と1年生の両方の思いを大切に活動内容を工夫することで、進んで取り組む姿勢を高めたいと考えた。

(2) 実践の流れ

流れ	活動の場	活動の内容
とらえる	朝の会	1学期のプロジェクト活動の振り返りや、1年生の担任をしている先生の話から、自分たちの課題を知る。
あつめる	朝の会	6年生として、1年生のためにできることは何か、また、1年生が6年生に期待していることは何かについて、それぞれの思いを知るためのアンケート調査を行い、集計する。
まとめる	休み時間	1年生と6年生、両方の思いが分かり、比較できるグラフを作る。
よみとる	学級活動	グラフの結果を基に、1年生の思いと6年生の思いで共通する部分や異なる部分をつかみ、比較しながら、よりよい活動について話し合う。
生かす	休み時間・学級活動	1年生のために「野並っ子チャレンジプロジェクト」を計画し、実践する。

(3) 実践の内容

ア 題材名

「野並っ子チャレンジプロジェクト」を成功させよう

イ 目 標

1年生と6年生の思いを共有し、プロジェクト活動の内容を考え、進んで行動することができる。

ウ 統計教育上の指導目標

1年生のためにどんなことをしたいかという6年生の思いと、6年生にどんなことをしてもらいたいという1年生の思いをそれぞれ情報として集め、グラフで可視化し共有することで、その結果を基に、よりよい活動を話し合うことができるようにする。

エ 実際の活動

【とらえる】…朝の会

1学期末に取り組んだ「野並っ子チャレンジプロジェクト」では、自分たちで話し合い、「学校のルールクイズ動画」や「あいさつポスター」を作って1年生に見せる活動を行った。6年生の取り組みを1年生はとても喜び、「とってもおもしろかった」「またやってほしい」と感想が聞かれた。児童は1学期のプロジェクト活動に対して達成感を得ていたので、2学期もこの活動を継続していけるように支援していこうと考えた。

2学期初め、私から1年生の担任の先生に困っていることはないかを尋ねた。すると、「コロナ禍で、学校の行事がなくなり、1年生は学校の本当のおもしろさや上級生のすばらしさを知らないから、これからの学校生活に明るい希望をもてていない」という話を聞くことができた。この話を6年生の児童の動機付けにしたいと考え、実際に1年生担任の先生の話ビデオで撮り、児童に見せた。児童は「僕たちが1年生の時には6年生と一緒に遊んでくれたよね。それがすごくうれしかった」「2学期も僕たち6年生が1年生の役に立つために何かできることはないかな」と新たなプロジェクト活動に対する自分たちの課題を知るとともに、次の活動への意欲の高まりが伺えた。



【1年生担任のメッセージ動画を見ている様子】

【あつめる】…朝の会

早速、児童は、「1年生に遊びを教えてあげたい」「行事のよさを1年生に伝えられないかな」と一人一人がプロジェクト活動の企画を考え始めた。そこでまず、1学期の取り組みを振り返った感想をみんなでもう一度読み返すことにした。「1年生のためになる企画を考えることができた」といった肯定的な感想が多かったが、「本当に1年生がやってほしかった内容だったのかな」「もっと1年生が望んでいる企画はないかな」といった反省を記述したものも少なくなかった。児童からは、「6年生の目線でプロジェクトを考えるだけでは、1年生の思いがあまり入っていない気がする」「1年生に本当にしてほしいことは何なのかを聞いてみようよ」といった意見が出てきた。そこで、「ロイロノートのアンケート機能を使えば、1年生と密接にならずに気持ちを確かめられるね」と児童にアドバイスした。

プロジェクト活動の計画委員が中心となって、「6年生にしてほしいこと」というテーマでアンケートを実施することとなった。その際、1年生に記述式で回答を求めることは難しいので、選択式のアンケートを作ることになった。まず、計画委員の児童がアンケートの原案を考え、学級全体に示した。アンケート項目は、様々な思いに対応できるように多種多様なジャンルで構成されていた。話し合いの結果、アンケート項目は、「一緒に遊びたい」や「学校のことを教えてほしい」など、右の8項目に決まり、そのうち三つを選んでもらうことになった。

- ・ 一緒に遊びたい
- ・ 勉強を教えてほしい
- ・ 学校のことを教えてほしい
- ・ 劇をしたい
- ・ フェスティバルをしたい
- ・ スポーツを教えてほしい
- ・ ダンスをしたい
- ・ 遊びの種類を教えてほしい

【話し合いで決まったアンケート「6年生にしてほしいこと」の項目】

さらに、計画委員の児童は、1年生の思いだけではなく、自分たち6年生の思いも確認するため、「1年生のためにするとよいことは何ですか」と学級全体に投げ掛け、同じ内容の項目でアンケートを実施した。

【まとめる】…休み時間

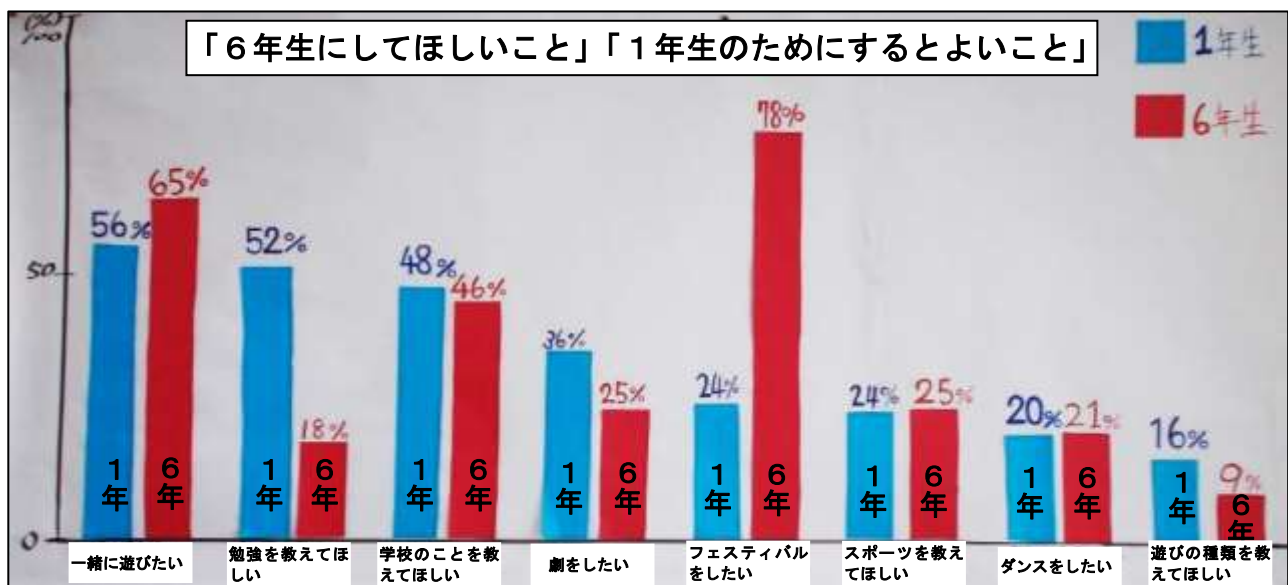
1年生の先生に協力して取り組んでもらったアンケート結果と、6年生のアンケート結果は、タブレットのロイロノートの機能で画面上に棒グラフになった。計画委員の児童は、でき上がった「1年生のためにできること」

「6年生にしてほしいこと」の二つの棒グラフを交互に見ながら考え込んでいた。私が「何か気付いたことはあるかな」と声を掛けると、「先生、何だかグラフが二つあるし、項目の



【アンケート結果を見ている児童】

順番がばらばらだからとても見にくいです」「1年生と6年生の学級の人数も違うから、分かりにくいです」といった声が上がった。その意見が発端となり、学級全体に提示する前に、グラフを分かりやすく項目ごとにまとめた集合棒グラフを作成することになった。また、私から、学級の人数による差をなくすために、割合で棒グラフの数値を整理することを助言した。こうして計画委員の児童は、学年ごとに色分けした見やすく、分かりやすいグラフを完成させた。児童は、でき上がったグラフを、1年生と6年生のいろいろな思いが表れているので「1616グラフ」（次頁）と名付けた。



【完成した「1616グラフ」】

【よみとる】…学級活動

完成した「1616グラフ」を見ながら学級会を行った。まず、1年生と6年生の両方とも割合が高かった項目を確認したり、どちらかのみ割合が高い項目に注目したりした。グラフにあるように、「一緒に遊びたい」や「学校のことを教えてほしい」は、1年生と6年生共に割合が高いと発言があった。また、1年生は、「勉強を教えてほしい」と思っている人が多く、6年生は、「コロナ前に行われていた児童会行事のフェスティバルをしたい」と思っている人が多いことがわかった。集合棒グラフにしたことで、両者の考えを把握しやすく、気付いたことを意欲的に発言する姿が見られた。

この「1616グラフ」をもっと詳しく読み取り、プロジェクトの活動内容を話し合うことができるように、私から、司会者を通じて、グラフの結果を基にその理由についての発言を求めた。すると、次のような意見交換が見られた。

司会：このような結果になったのはどうしてだと思いますか。

C1：「一緒に遊びたい」という意見は、みんな遊びが好きだし、お互いに仲良くなりたいと思っているから多いと思います。

C2：「学校のことを教えてほしい」という意見が両方とも高いのは、1年生はコロナが原因で、本当の運動会とか本当の学芸会とかできていないから知りたいと思うし、6年生も、学校の本当の楽しさを1年生に知ってもらいたいからだと思います。

C3：「フェスティバルをしたい」という意見で1年生が少ないのは、フェスティバルがどんなものかわからないから少なく、6年生はフェスティバルの楽しさを知っているからそれを1年生に伝えてあげたくて多いのだと思います。

C4：全体的に楽しいことや笑顔になれるようなことを選んだ人が多いと思います。



【話し合いの様子】

児童は、1年生の担任の先生が動画で話していたことを思い出し、学校行事や学校生活の楽しさに注目した意見を多く出している様子が見られた。その後、実際にどのような活動をしたらよいかを決めるため、意見をまとめる話し合いに移行した。

司会：意見をまとめていきます。意見のよい点や改善点を発表してください。

C 5：「一緒に遊びたい」はやるべきだと思います。理由は、1年生も6年生も互いに選んだ人が多いし、コロナでいろいろと制限がある中でも、学校が楽しくなるような遊びがあると楽しいし、みんなが笑顔になれるからです。

C 6：「学校のことを教えてほしい」に賛成です。両方の意見が多いということもあるし、コロナでできていない本当に楽しいことを、1年生に伝えてあげたいからです。

C 7：「学校のことを教えてほしい」という意見を選んだ人が多いけど、「フェスティバル」も「学校のこと」の一つなので「学校のこと」に入れてもいいと思います。

C 8：今の意見に賛成です。6年生の思いも生かして、1年生の思いも大切にするなら、「フェスティバル」も「学校のことを教えてほしい」に入れていいと思います。

T：「勉強を教えてほしい」や「劇をしたい」のような1年生が多かった項目はどうしますか。

C 9：算数や国語だけではなく、行事や今みたいな学級会も勉強だから、どんな項目も「勉強を教えてほしい」に含まれると思います。

話し合いの結果、児童は、「一緒に遊びたい」「学校のことを教えてほしい」「フェスティバルをしてほしい」の三つの項目を採用した。「フェスティバルをしてほしい」に関しては、1年生のアンケート結果の割合は低いものの、実際に経験している6年生が「楽しさを教えてあげたい」という点と、フェスティバルも「学校のこと」に含まれるという意見から採用された。1年生の思いを大切にするために、「劇をしたい」については、「学校のことを教えてほしい」グループが取り入れることとし、児童は、三つのグループに分かれて、それぞれ企画を進めていくことになった。

【生かす】…朝の時間、休み時間

「野並っ子チャレンジプロジェクト」第2弾として、「一緒に遊びたい」「学校のことを教えてほしい」「フェスティバルをしてほしい」の各グループで、具体的な活動内容の話し合いが始まった。私は、それぞれのグループが自信をもって企画を進めていくことができるようにするために、生活指導の先生を教室に招いて、自分たちの企画がコロナ禍でも実現可能なのか相談にのってもらうことにした。生活指導の先生から、「コロナで大変だけど、知恵をしばって楽しい企画を考えたい」と励ましの言葉をいただいたことをきっかけに、それぞれの児童がさらに一生懸命に考える姿が見られた。



【生活指導の先生に相談している様子】

① 「一緒に遊びたい」グループの企画：「しっぽとり」「だるまさんの宝探し」

生活指導の先生の話をもとに、児童は、運動場でできること、密にならず、身体との接触が少ない遊びを進んで考えた。「しっぽとり」は、ひもの長さを学年で調節して、みんなが楽しめるように工夫されていた。「○○ちゃん、走るの速いね」と進んで1年生に声を掛ける姿も見られた。また、「だるまさんの宝探し」は、「だるまさんが転んだ」のリズムに合わせて地面に落ちている宝物を拾うオリジナルゲームで、みんなが楽しく遊ぶことができた。



【しっぽとりの様子】

② 「学校のことを教えてほしい」グループの企画：「学校スタンプラリー」「ミニ学芸会」

児童は、密を避けることができるように、校内の様々な場所にちなんだクイズを解きながら、マップを埋めていく「学校スタンプラリー」を計画した。1年生の児童は学校探検とは違った出し物

にとっても喜んでいる様子が見られた。自分たちが一生懸命に考えた企画ということもあり、児童一人一人が「クイズのヒントはいりますか。」「次のチェックポイントは階段を上った先があやしいぞ」と1年生に対して自信をもって取り組んでいる様子が見られた。さらに、このグループは、「劇をしてほしい1年生も多かったし、学芸会のすばらしさも伝えたいから」と、実際に自分たち6年生が1年生の頃に演じた「そんごくう」の一場面を披露する計画を立てた。最初は恥ずかしがっている様子だったが、1年生の熱いまなざしを見て、6年生の心に火が付き、「金角、かくごしろ」と気迫あふれる演技で1年生を魅了した。演技終了後には1年生から大きな拍手が生まれた。



【ミニ学芸会の様子】

③ 「フェスティバルをしてほしい」グループの企画：「モグラたたき」「的当て」

児童は、運動場でできる出し物を考えた。「モグラたたき」チームは、モグラをゆっくり操作したり、「キングモグラをたたくと、プラス15点、サングラスモグラをたたくとマイナス5点」といった楽しいルールを追加したりして1年生を楽しませていた。「的当て」チームは、1年生でも簡単に得点できるように投げる位置と的の距離を調節し、「あそこの的が狙いやすそうだよ」「遠くの的は得点が高いから頑張って」とアドバイスする姿が見られた。活動後、1年生から手紙が届いた。そこには「リズムやゲームがあって楽しかったです」「フェスティバルや学芸会のことを知ることができてうれしかったです」と感謝の気持ちがたくさん書かれていた。6年生はプロジェクトの成功を実感し、笑顔があふれた。



【モグラたたきの様子】

(4) 成果と課題（成果：○ 課題：●）

11月の実態調査は右のようになった。9割以上の児童が肯定的な回答になり、自分たちで次のプロジェクトを計画しようとする声もすでに出ている。ここから、以下のように成果と課題をまとめた。



【実態調査アンケートの結果4月と11月の比較】

○ 1年生と6年生の思いを可視化して「1616グラフ」にまとめたことで、必要な情報を読み取りやすくなり、自分たちだけではなく、1年生の思いも共有しながら活動内容を話し合うことができ、プロジェクト活動を成功させようと進んで行動する姿がたくさん見られた。

● 1年生の思いを集約したものの、アンケート項目は6年生が考えたため、1年生の思いを十分に反映したものではなかった。次回のプロジェクト活動では、「あつめる」場面で自由記述を設けたり、聞き取りを行ったりすると、より1年生の思いを反映した検討ができると考える。

3 研究のまとめ

本実践では、統計的手法を用いて、1年生と6年生の思いを情報として集めて「思いの可視化」を図り、共有できるようにした。互いの思いを共有して活動計画を立てることで、児童は、より生き生きと活動に取り組むことが分かった。今後も、このような統計的手法のよさを生かして実践を続け、よりよい学校づくりのために、進んで取り組むことができる児童を育成していきたい。